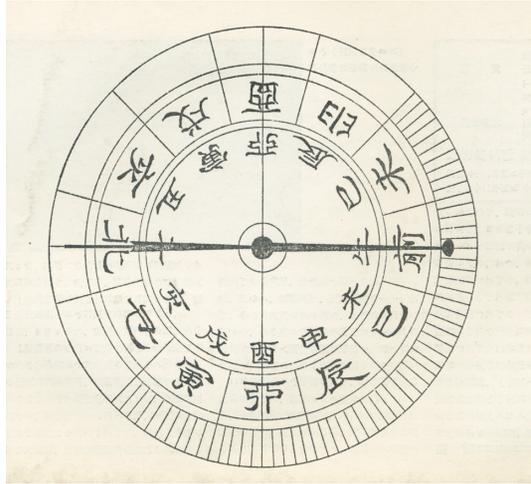


尾形亀之助読書会通信

第三号



「北日本詩人」大正15年4月号の表紙絵・尾形亀之助

第三回尾形亀之助読書会

二〇二二年五月二十七日 大河原・繁昌院

吉田美和子講話録

「四十年がかりでやっと亀之助論を書きました」

『単独者のあくび 尾形亀之助』

木犀社二〇一〇年

今日は、どうして自分が亀之助をやってきたのかということを、ちょっとお話しさせていただこうかと思っております。四十年がかりで亀之助論を書きました。四十年間ずっとやってきたのではなくて、取りか

かかるまでに四十年かかったという意味なのです。

一 亀之助なんかを読んでいては、生きていかれない
： 亀之助詩の魅力と魔力

なんでもなくて、ただならぬもの——亀之助の詩は
そういうものである。

大学時代に色々な詩を読んで、亀之助に出会ったときに、感覚的に、生理的に自分に近いものを感じてしまつて、それ故にそれをきちんと対象化できなかったですね。そのときは国文科の学生でしたから、卒論を書かなければならないのですけれども、とても亀之助のような正体不明な詩人は扱えないわけです。また、学生でしたから、こちら側にきちんとした方法論ができていない。それで、私が扱ったのは吉田一穂という詩人です。もちろん卒論では何も書けませんでした。後でやり直して、十年かかって『吉田一穂の世界』（一九九〇年三月舎初版、一九九八年小沢書店復刻）という本を書きました。

一穂という人は、亀之助とは同世代で、『歷程』派として亀之助とも友達であります。タイプとしては正反対ですね。硬くて、叩けばコーンと音がするくらい、厳として透明な、いつでも変わらないさわやかさというか、誇り高さというか、そういうものを持っております。そういう詩人の方が、やっていて自分の土台を築く上で、何かの手がかりになってくれるのではないかという思いです。つまり、一番遠くの人をやったという気持ちです。

それで、一番近い亀之助は、すぐにはできなかったです。「亀之助なんか読んでいては、生きていかれない・・・」とレジメに書きましたけれど、例えば、勤めが始まったときに、朝五時半に目覚ましをかけて、弁当を作つて、ぱつと家を飛び出していくような勤労生活の中では、亀之助のようにけだるくて、朝まで電灯を見上げていような不眠症の詩を読んでいては、自分が倦怠の沼にずぶずぶとなつて這い上がれ

ないような恐怖というか、魅力ではあるけれど、ここでは生きてはいけないという気持ちがあつたりました。在職中は、賢治をやつたり、一茶や放哉をやつたりしましたけれど、亀はとことん遅れてしまうのです。本命は最後というか、そんな感じになつてしまいました。

結局、取りかかれたのは、退職後、それもつれあいを亡くして独りになつてからです。退職のときにこんな詩集『木槿の時間』、二〇〇四年三月舎発行）を作つて、そこに「美しい男——『尾形亀之助論』序詩」という詩を載せました。これは辻潤のことを、小島キヨという何番目の奥さんが、というか同棲していた人が語つた言葉を読んだときに、その笛を吹いている辻潤が、神々しくて、本当に美しいと書いているわけです。へっ、と思つて、やっぱり、惚れた男は美しく見えるのだから。そう言わせる男は凄いな、と思つていました。なにせ、相手が辻潤ですからね。あの貧乏神みたいなのにわけのわからない男です。それを美しいと言いつつ切ること驚き、美しい男って本当にいるのだろうかという詩を書きました。それは、幻想立体、ホログラムとルビを振りまいたけれど、幻想の中にしかないという詩です。つまり、どんな人間だって、生身の人間って、そんなに美しくないわけです。けれどやっぱり何故惹かれるのかというと、そこに「詩」の問題があるのです。

退職して詩集を出して、さあ亀之助をやるぞと決意表明をしたのですが、ぐずぐずしていたら、連れ合いが癌で亡くなり、盛岡の家に一人ぼつんと、暇になつて一〇〇%自分の時間になつてしまつたとき、やっぱりやらなきゃいけないと思つていました。それでも気持ちを整えるのに時間がかかつて、芭蕉の弟子の越智越人のことを書いた『うらやまし猫の恋』（木犀社二〇〇八年）が先になつてしまいましたけれど。

二 亀之助は自分を語らない：資料探し「状況証
拠」の難しさ・おもしろさ

探偵ごっこ…新しく見えてくるもの

それまでの、バラバラのメモやわけのわからなくなった資料を並べ、何が足りないのか考えるところから始めました。今は、パソコンで蔵書検索とか、古本の検索とかができるから、資料が見つかります。けれど、十年前前は岩手の片田舎には何も無かったです。まず、亀之助の全集が、どこを探してもないのです。それで、東京に出かけて、神田の辺りをあてもなく彷徨って、古本屋で「亀之助全集は出てないですか」と聞くと、「いやあ、出ませんね。出てきても高いですよ」と言われました。だから古本屋に全集が出たときには飛びついて買ったわけです。そのとき、一冊六万円しました。その直後、思潮社から新版が出て、なんだと思いましたが、やっぱり新旧両方を持っていると書くときに、いろいろなヒントがあって良かったです。

そんなこんなで、それこそこちらの中里先生にお世話になりました。中里先生が、見も知らない私に、自分が書いた卒論の亀之助論をわざわざ送ってくんだり、貸してくれました。私は全部、コピーにとって、色々参考にさせていただきました。

レジメに「亀之助は自分を語らない」と書きましたが、彼は全然、自分のことを何もしゃべらない人です。ですから、全集をみても、あまりわからないです。だから、結局、その当時の草野心平だとか、周りの人の回想録の中に亀之助がどのように出てくるのか、という当時の資料を片端から探しました。状況証拠です。そして、少しずつ、彼らから見た亀之助、それこそホログラムのように、光が当たってぼーっと、ある詩人のイメージが浮かんでくるのです。

私は岩手で生まれて、東京を知らないものですが、亀之助の詩の生まれた空間というか、土地の気配というものを知りたいと思ひまして、果てなくウロウロしました。東京暮らしを始めた白山とはどういう場所、『色ガラスの街』の主たる舞台であった上落合っ

てどんなところだったのだろう、という感じですが。そういうことって、いったい詩の理解に必要なのだろうか。これは難しいわけですが、必ずしも現実と対応させる必要はないのです。文学というものは、もっと自立したものですから。つまり、芭蕉の俳句を読むために、奥の細道を全部歩かなければわからないか、ということではないわけです。亀之助は現実の地名だとか人名だとか一切使わない人ですから、特に、必要ないわけです。だけれども、行ってみると、あっと思うところが多々ありました。つまり、亀之助の詩って、そんなに積極的に熱弁するタイプでなくて、ほとんどん切り捨てていって、知らん顔しながら、ちょっとだけ、何かヒントをつぶやくようなタイプですから、普段は気がつかないで読んでいます。現地に行ったときに、あっと思うことがあったりして、だんだんそれがおもしろくなって、そのために、書き下ろしの『単独者のあくび』はゴチャゴチャと資料を詰め込みすぎて、なんだか読みにくい、ひどい本になってしまいました。

レジメに「探偵ごっこに： 現地で新しく見えてくるもの」と書きました。例えば、上落合と二四番地」と書いてありますが、今の地図を見ても、番地は違って立圖書館に行くと、昔の地図を探しました。明治の地図にはなく大正の地図も詳しいやつは、山手線の中しか載っていないくて、上落合の辺りは載っていません。二時間ぐらい格闘して、なるほどこれかな、というところをコピーしました。神社、仏閣は、基本的に動きませんから、例えば町が変わっていても、この地形、この道路の下は川だったのかとか、だんだん昔の様子が見えてくる、その感覚がおもしろかったです。

窓をあければ何があるのであらう
くもりガラスに夕やけが映つてゐる

帰ってこない。そういう時、彼の詩をめぐる空間の感じみたいなものは、やっぱりその場に行つたときにおもしろいなと思つて、何年もそういう追っかけをやつて暮らしていました。

一つずつ喋ると時間が無くなるのですけれど、もう一つだけお話しします。上馬という場所に行つたときに、それはここにある詩「雨になる朝」が生まれた場所です。

今朝は遠くまで曇つて
鶏と蟋蟀が鳴いてゐる

野砲隊のラツパと
鳥の鳴き声が空の同じところから聞えてくる

庭の隅の隣りの物干に女の着物がかゝつてゐる

「雨になる朝」

この詩は私がりわりと好きな詩だったのですけれど、ここを訪ねて行つたときに、その前に戦前の地図を見てぎよっとしたのです。隣が、駒沢の練兵場だったのですね。その練兵場という言葉は知っているし、昔はそうであったと知識としては知っていても、そのことが感覚的に自分の中にうまく交差していないのです。例えば、東京の日比谷公園ですが、あそこは昔、練兵場だったけれど、あんまり真ん中だったので、都市化するに従つて、手狭になると郊外に大きなものを作るのです。その駒沢練兵場の辺りは三軒茶屋の辺りですが、非常にでこぼこして田んぼなんか作れないような地形でした。わりと空が狭く、ロード状になっているみたいなきな感じです。そうすると、ラツパと鳥の声が空の同じところから聞こえてくるという言い方が、ものすごく感覚として正確だと思つたのです。なんかこう、音が空の真ん中でぶつかる、という感じが

あります。彼はいつも何気ないふうには詩を書いていますが、感性の捉え方が、恐るべき正確さを持っているなど感じました。彼の詩の特徴は、それが天皇の赤子だろうと軍隊のラツパであろうと、コケコッコであるろうが、カラスのカーであろうがみんな同じなのです。個々に価値の優劣をつけない。一切を解体してバラバラにしてしまふというか。そこに彼の虚無、大変なニヒルと過激さがあるのですけれど、それが構造的には、野砲隊のラツパに対する批判の側面を持つてくるといふところに、怖さとおもしろさがあります。亀之助は絶対自由主義みたいところがあつて、ありとあらゆるものをバラバラに分解して、序列をつけないのです。そんな兵隊のラツパというものも、彼の生活の中ではリアルに、直ぐに聞こえてくる場所に暮らして居たのだということ、行つてはつと気がつく、そんなふう読んでいったのです。マニアの追っかけです。

三 第二詩集『雨になる朝』昭和四年 の序「二月」

子供が泣いてゐると思つたのが、眼がさめると鶏の声なのであつた。

とうに朝は過ぎて、しんとした太陽が青い空に出てた。少しばかりの風に檜葉がゆれてゐた。大きな猫が屋根のひさしを通つて行つた。

二度目に猫が通るとき私は寝ころんでゐた。空気銃を持つた大人が垣のそとへ来て雀をうつたがあたりなかつた。

穴のあいた靴下をはいて、旗を持つて子供が外から帰つて来た。そして、部屋の中が暗いので私の顔を冷たい手でなでた。

「二月」

この詩を読むと、上馬時代の亀之助がよくわかりま

「恋愛後記」

これ、上落合の詩です。行つてみると、こんな地形でした（紙を二つ折りにしてV字にする）。妙正寺川があつて、それが神田川に合流しますので、「落合」なのですが、この真ん中（折つた紙の一番窪地の部分）が川だとすると、亀之助は北斜面、日陰になる方の新築アパートに住んでいるのです。日当たりのよい方の向う岸の斜面は目白とかの高級住宅地です。上落合の方は、昔は、金のないプロレタリア作家とかがいつぱい暮らしていた地区です。だから、林芙美子なんかは、カフエの貧乏女給時代は、こつち側（陽の当たらない側）の斜面に暮らしていて、流行作家になって、金ができたなら、こつち側（陽の当たる側）に家を建てた。いま記念館になってします。亀之助は金持ちでしたが、たまたま川のこつち側（陽の当たらない方）に暮らしているのです。そこに行つたときに、この詩をばつと思ひ出しました。「窓をあければ何があるのであらう。」南にずっと歩いて行くと、地形的に吉行あぐりの店があるのです。これは、恋愛を自分に封じた詩です。「恋愛後記」ですから「恋のあとがき」。ものすごく苦しんで、七転八倒して、恋愛を自分で閉じなければいけないと決意したときに、もう窓は開けないですよ。開ければ、向こうに東中野駅の向こう側が見えるのですけれど、それを開けないです。曇りガラスですから、外は見えない。けれども、夕陽は映っているのです。この凄く切ない感じというのが、やっぱりその場所に行つた時に、はつとするものがありました。

私も実際に、ぶらぶら坂を上つて、東中野駅まで歩いてみました。私の足で二十五分くらいです。だから、亀之助は夕暮れになると、夕焼けがほとんど暗くなって落ちていくと、もう居ても立っても居られなくて、二階の書斎から階段をとこと下りて、奥さんに行つてくると言つたのかどうか知りませんが、ぶらつと出て行つて、夜通し吉行あぐりのカフエに行つて

す。離婚して、泉ちゃんという娘と二人で暮らしています。「男のママになった」と亀之助は言っていますけれど、その時の心の中にある大変な鬱屈みたいなものが、この詩にはよく出ています。

この最後の子供の扱いが、凄いなと思うのです。ちっちゃな手が、とてもかわいいのですけれど、それに触られるときの、ぞつとするような切ないような、苦しい感じに、亀之助はじつと耐えています。彼の詩の持つ特徴は、いわゆる形容詞がないということです。悲しい、嬉しい、寂しい、という感情を表す言葉が一切ない。その状態について優劣をつけたり、評価したりしない。ここは、ただ事実をそのまま書くだけなのですけれど、書き方がやはりものすごくうまいわけ

です。穴の空いた靴下を履いていることは、父と娘だけの男所帯で、もちろん世話がゆき届かないということとを言うわけです。けれど、私はこれを読んでいて、部屋の中が暗いので夜？いや違う。えっ、夕方？と考へたのです。暗いということは、亀之助は雨戸を開けないですよ。それは『障子のある家』を読むとわかるのですけれど、ほとんど開けない。開けても一枚ぐらいいちよろつと開けているだけで、昼でも暗いのです。子供が外から入つてくれば、特に光の落差がありますから、暗くてパパがよく見えないので、なんとなく「ただいま」と言つて、「お父ちゃん、眠っているの？」と、こう顔を触つたという。冷やっこい手。そのときに、旗を持つて子供が帰つて来る。これもなんとと思わないでずつと何年も読んでいたのですけれど、あるとき、えっ？「旗？」と思ひまして、あつ！と思つたのです。二月ですから、ひよつとすると、亀之助は何も語りませんけれど、これは二月一日と考へられるわけです。昔は紀元節といいますが、今の建国記念日です。彼が一日中雨戸も開けずに寝っ転がっている間、外はもしかすると、旗行列のようなものがあったかもしれません。泉は、退屈だから、外に出て行つて、近所のおばちゃんから、「あら、いずみちゃ

ん、いらっしやい」と言われ、日の丸の小旗を持たされたくらいにして帰って来たのかもしれない。

亀之助の詩がおもしろいと思うのは、彼は全く世の中を無視しているような詩人ですけれど、ものすごく鋭敏に世の中を受け止めている、感受しているわけですね。この当時の詩人達、例えば、プロレタリア詩人なんかは、外の社会に対して、世の中と全面的に対峙しているかもしれない。反対に、芸術家タイプの人は、たとえ「あはれ花びらながれ」をみながら「花びらながれ」の三好達治の詩のような、世の中どうなっても自分は美に生きるぞ、みたいな詩人たちもいます。

亀之助はどっちだと言った場合に、一見、世の中を無視して完全にドロップアウトした人のように見えませんが、実は世の中の有様を、外の世界を内側の自分が、自分の皮膚一枚で支えている、感じ取っているという、そういう詩としての凄さ、怖さがあると思います。ここでも、子供が帰って来て、「お父ちゃん」と触ったときの、かわいらしい手の冷たさに、亀之助はじっと耐えなさいけないのですね。私は、それが彼の詩人としての戦いだっと思えます。世間的な評価からすれば、もう完全に負けっ放しの亀之助なのですけれども、彼は一步も退かない。そういう感覚の世界では一步も退かないというか、そういう世間に押しつぶされた自分の自己をじっと見ているのが亀之助の詩です。

詩から一切の「表情」——それは意味であり価値である——を抜き去ったこの亀之助詩のスタイルは、詩人が読者に突き付ける冷たい鏡であるだろう。日常のさまざまな身振りを意味であり価値であるとする情性や強制や誤認にまみれた「表情」のなかに、おおむね私たちは生きていくからである。

『あくび』二二三ページ

ここは、わたしの本からの引用ですけれど、これです。考えてみれば、震災前に書いたわけです。これを震災後の今の状況の中に置いてみたとき、自分でギョッとしました。かなりきわどいことを書いているなと思いました。

世間に溢れるさまざまな言葉、価値観、そういうものを、この文章は「表情」という言葉で捉えています。私たちがはいるんな身振りで適当に、それなりに格好いいことを言ったり、世の中に合わせてみたり、誤魔化したたり、なんかして暮らしているのですけれど、亀之助は、そういう「意味」や「表情」を一切寄せ付けない。それが彼の詩の虚無の恐ろしさであるのですけれど、同時に魅力でもあるわけです。自分の中の曖昧なものとか、いやらしいものとかが見えてしまう。亀之助の、こうまで空虚なものを見たときに、私の中にある、空っぽじゃない濁ったぐちゃぐちゃしたものは何だという、そのときのやましさみたいなものが見えてしまう。それが亀の詩の魅力かなと思ったりします。もちろん、そういうきつい話ばかりではなくて、とってもフアンタジックな素敵なかわいい詩もいっぱいあるのですけれど、戦争というファシズムの時代が彼を許さなかったわけですね。

四 第3詩集『障子のある家』昭和5年

詩集誕生の悲劇性：しかし、日本語散文詩としてのおそろべき到達点

しどといユーモアと文体の剛直、精神の健在、アイロニーの陰影

第三詩集『障子のある家』の話をします。詩集『障子のある家』は、こんな薄っぺらな小さな詩集です。実物は、駒場の近代文学館にあります。そこで表紙と裏表紙をカラーコピーして、大きさとページ数を合わせて、大体の雰囲気再現してみました。ああ、亀はこんなものを作ったのかと胸にしみました。最初の詩

「大キナ戦」【絶筆】昭和一七年九月の「歷程」に発表

大きな戦争がぼつ発してゐることは便所の蠅のやうなものでも知つてゐる。

「大キナ戦」

それで、実は亀之助論を書き終わった後に、こういう古本を見つけてしまって、ああ、これを持っていれば、あと一ページ書ききたかったのになあ、と思う本があります。これはですね。『此の糧』というタイトルで、尾崎喜八の詩集です。尾崎喜八は、高村光太郎と並んで称される人道主義の詩人で、亀之助と交流のある先輩詩人ですが、その人が昭和一七年に出したものです。日本中が戦争で湧き立っていました。尾崎はこの年、「日本文学報国会」の結成大会で、詩を朗読して、大層有名になりました。その「芋の詩」を紹介したいのですけれど。実は、この装丁を見せたくて持ってきました。まさに日本家屋ですね。どうでしょう、つましく、でも清潔な、何か温かく、その家族の愛に支えられた空間、この絵を描いたのは芹沢圭介です。『此の糧』の「糧」とは、食料ですから、配給のサツマイモです。つまり、亀之助の生きていた時代の空気をものすごく表しています。美しき銃後の日本臣民の姿です。亀之助の『障子のある家』の世界と、この詩集の世界が見事に両極端をなしています。

（吉田さんの友人にの石原さんが尾崎喜八の芋の詩を朗読）

芋なり。
薩摩芋なり。
その形紡錘に似て

集『色ガラスの街』は、立派なハードカバーの詩集です。そこからは、それなりの、亀之助の夢や野心も見えてくる詩集です。この『色ガラスの街』は凄いですよ、ページが振っていないのです。おかしな本なのですね。この本の一番後の「こんな見えないところ」に「この巻を父と母に捧げる」と書いています。貰った父と母も気づかないと思うのですけれどね。これが詩人として立とうとする亀之助の最初の気分だったわけですから、三冊目がこう、ひらひらになっちゃうわけです。しかも、七十部しか作っていないです。これ（『色ガラスの街』）は、五百部作ったのかな。だから、ほとんど自分の詩人としての存在というものに、苦しんでいくのですね。『障子のある家』も、作ろうか作るまいか、凄く悩んで、とりあえず作って、行方不明になるわけです。実際は、上諏訪温泉に行って、ただ遊んでいただけだったのですけれど。その時、詩集の扉がこうですよ。私は、これは面白いと思います。

この下駄がとってもかわいい。亀自身が書いたのだと思います。版画で刷ったものだと思いますけれど。で、これ何だかって、やっぱり日本人にとって履物を揃えておくことは、さよならの合図ですよ。自殺するとき、必ず昔は、川に飛び込むときでも、ぞうりをこいう合図をこの世に送るのです。だから、こう本を開けたときに、あつ、下駄が脱いである。これはやっぱり、友達に対するさよならの合図です。まあ、本当に死ぬ気だったのは別として、彼独特のユーモアなのです。そして、例の有名なセリフの「つまづく石でもあれば私はそこどころびたい」、あれどこに書いてあるのかというと、奥付のこの辺り、ものすごくくちっちゃんい字で書いてあるのです。で、表紙もこれもね、見えないでしょう。これがタイトルなのです「障子のある家」。写真資料では全気がつかなくなりましたが、やっぱり実物見たら、えっ、書いてあるじゃないの、ものすごく小さな字が打つてあるのです。これが亀之助ですよ。つまり、彼は、本当は非常に人に理解さ

りたい人だったのですけれど、それを表現というのかな、モロに言えない。非常にシヤイな繊細な人間でありますから、できるだけ解らないように書くところがあります。半分は悪戯です。この素敵な下駄の版画が全集になると、カットがこういう風（下駄が横にそろえてある）に載っています。鬼の亀之助研究家秋元潔が監修したはずの全集が、どうしたんだらう、そんなことも、あれこれやっていると色々見えてきて面白いです。

彼はこの詩集を出す時に、非常に悩んだ気配がある。

こんなことやったってしょうがないから、やめてしまおうと思った。だけれども書かれてある散文詩は、本当に私は凄いなと思います。亀之助は五年くらいしか詩を書いていないわけで、これ（詩集『色ガラスの街』）からこれ（詩集『障子のある家』）まで、わずか五年の間の、自己変革というか、自己鍛錬のすごさというか。最後の『障子のある家』の散文詩は、あの日本語の面構えというか、不動性というか、もちろん書かれてあるのは、駄目男のどうしようもないへぼ詩人のどうしようもない日常なのですけれど。それを語るとき語り口のふてぶてしいほどの強靱さは、私は日本の散文詩の作品の中でも、特筆すべき作品群ではないかと考えています。

で、『障子のある家』は、日本家屋をテーマにしています。はじめと雨が降り込んで、畳が湿っぽくて、焼け焦げた跡があったりして。自分を取り巻くみずぼらしくいじましい日本社会をテーマにしている、その中で、親が、おい、お前は、もう三一にもなったのだとか、夢に出てきて、夢で（亀之助が）親父をぶん殴ったりして、そのどうしようもない、いわば世間的に言う、自立できない男なのです。けれどもそうやって、詩人という存在を許さない日本というものの感触をひたひたと書いている詩なわけですね。

五 亀之助が寝ころんでいるうちに、時代の方が渦巻き沸騰して駆け落ちていった

混食の料とするてふかたじけなさよ。
つはものは命ささげて

海のかなたに戦ふ日を、
銃後にありて、身は安らかに、
この健かの、味ゆたかなる畑つものに
舌を鼓し、腹打つ事のありがたさよ、
うれしさよ。

芋なり。

配給の薩摩芋なり。

その形紡錘に似て
皮の色紅なるを紅赤とし、
形やや短かくして
紅の色ほのほのたるを鹿児島とす。

尾崎喜八「此の糧」



これを紹介したのは、詩集『障子のある家』に亀之助が込めたものと、尾崎喜八が描くこの障子のある家との、いわば落差というか、位相の違いを紹介するためであります。たまたま亀之助の親しくしていた先輩詩人尾崎だけでなく、世の中が全部こうなっていた中で、亀之助の最後の詩が例の「大キナ戦」というつぶやきの、けだるさの凄さ。それをやはり時代の中に

一番に明るい。

〔三月の日〕

若い頃は、とても亀之助なんか読んでいたら、生きていけないと思ったのですけれど、この頃は逆なのですね。そうなのだよ、亀之助の詩の一行があれば、そこに自分が踏みとどまれる、というような意味で、こんな反社会的人間に励まされるのも、不思議なのですけれど、勇気を与えてくれる。そんなふうには思っています。



置いてみたときに、その不気味な輝きが見えてくるなあと思うのです。で、もちろん、亀之助の『障子のある家』は昭和五年ですから、一〇年以上の時代の落差があります。けれど、亀之助がこの詩の中で、日本人であることが嫌になったと、つぶやく詩があります。その持っている揺るがない芯というものをやっぱり忘れないでいたいと思います。

私が亀之助論を書いた最大の関心は、どうして戦争の時代に、どうして詩人達はあんなにどどどどどどどと、戦争賛美になだれ込んでいったのか、ということでした。それが、しかも、亀之助が凄く尊敬していた高村光太郎であり、親交のあった草野心平であるわけです。もちろん、他も全部がそうなのですから、そのときに、誰も抵抗できなかった、ということが、怖いのですね。もちろん、気持ちの中では反対した人は、いっぱいいると思いますよ。

こないだも、吉行淳之介のエッセイみたいなものを読んだときに、自分は学生の時に反戦の詩を書いていたらと自慢げに紹介している文章があった、そんなのいっぱいいただろう、と思うのです。発表するかどうかの問題なのです。亀之助は違います。僅かですけれど。仙台に帰ってからは、ほとんど断筆状態でしたから。だけれども、「大キナ戦」なんかは、活字になって『歷程』に発表しているわけです。それでも、どこからおお咎めが無かったのは、ほとんど無視されたからなのですから。

どんな場面でも亀之助は妥協をしないというか、あらゆる場面で怯まないというか、だけれども、結局、寝そべっているしかなかったというか、そういう語り口でしか生きられない時代であった。ここに持ってきたのは、草野心平の『大白道』という詩集。これは、昭和一九年です。戦争も終わりに近いものですが、彼が南京政府の顧問をしていて、「撃チテシマン」という詩を書いて、それをピラにして一〇万枚空から飛行機で、陸軍記念日に撒いた。自分の書いた「撃チテシマン」という詩が、ピラになってさらさら中

あとがき

尾形亀之助読書会通信の第三号をお届けします。本来は、隔月開催の読書会の合間の月に発行しようと思っていたのですが、第三回尾形亀之助読書会での吉田美和子さんの講話がおもしろく、録音したデジタルレコーダーからの文字起こしに、殊の外、時間がかかってしまいました。本来、一〇月には第五号を出していなければならぬのにもかわからず、遅れに遅れて、今回、やっと第三号を出すことができました。

ということで、第三号は、吉田さんの読書会での講話の内容のほぼ全体を掲載させていただきます。吉田さんには、この間、二度ほど内容をチェックして、だいぶ朱を入れて訂正をしていただきました。なので、ここに掲載した文章は、読書会当日の話よりも、吉田さんが語りたかったことがより明確になっていると思います。

吉田さんの、亀之助に対する愛情溢れる暖かな視線と、その先に見えた亀之助の詩の恐ろしいまでの美しさが、ひしひしと伝わってくる講話でした。改めて、素敵なお話をしてくださり、夜遅くまで付き合っていたいただいた吉田美和子さんに感謝したいと思います。

第四回尾形亀之助読書会は、「水のなかの水」の詩人」というテーマで、西田朋さんにお話をしていたいただきました。亀之助が感じて、表現した雨あるいは水と、西田さんが感じ、表現した雨・水との違いが聞いているおもしろかったです。詩人同士、感じ方、表現は違えども、同じ言葉を扱う者同士です。もちろん優秀はなく、雨はいつでも、誰に対しても等しく降り注ぎ、水は誰にでも等しく存在しています。

第五回尾形亀之助読書会は、「亀どの句会」と称して、俳誌『小熊座』の編集長渡辺誠一郎氏をゲストにお迎えし、亀之助の俳句と短詩系文学からみた亀之助の詩について、お話をさせていただきました。その後、繁昌院の境内を参加者が思い思い散策し、ミニ吟行？を行わせていただきました。俳句は、亀之助の子どもの頃か

国の大地に降り注ぐ、一〇万枚ですよ。亀之助は七〇部です。

そういう彼らは、いったい戦後に苦しまなかったのか、そのことが私には、今でもなおテーマとして、残っています。戦争詩の問題は、決着がつかないですけれどね。この『大白道』も発行日は、紀元二六〇三年と書いてあります。これを買った人は、誰だか解りませんが、きちんと二六〇四年七月二一日に神田で買ったとメモしてあります。そういう時代だったんですね。そういう時代の中で、亀之助の特異さが際立っていたのではないかと語りたくて、ぐずぐず長くかかってしまいました。そこで、最後に、こんなことを書きました。「自分をだますことは簡単だ」。つまり、さっきの芋の詩の彼だって、ものすごくまじめに一生懸命書いているのですね。それは自分をだましたということになるのかわからないですけども、でも人は自分自身をだましたと言うことに気付かないでうまいことやってしまうわけですから、自分をだますことは簡単です。「そうであったなら、詩人として言葉をつかう意味はない。戦争詩の時代は、私たちにそのことを教えてくれる。亀之助のなかには、自堕落と見えて、肅然としたある醒めた清らかさは『自分をだまさない』、結局そのことなのだろう。」と書きましたけれど。

まあ、どうなのでしょう、私はそんな風に感じる。これこそ、最初に言った幻想なのだと思うのですよ。実際の亀がそうであったという意味ではなくて、詩から伝わってくるメッセージとして、そういう何も無い清らかさみたいなもの、自分の力だけ立っている人の美しさのようなものを感じる。それが、詩の力なのだと思うのです。

六 どうやら、亀之助詩一行あれば生きていけそうだと

障子に陽ざしが斜めになる頃は、この家では便所が

ら周りに身近にあったものでした。そして、故郷仙台でひっそりと暮らした晩年も身近にありました。渡辺氏の話聞きながら、亀之助の詩表現と俳句との関係に思いつくことが多々ありました。ただし、亀之助の俳句は、現存しているものが十作品のみなので、明確に語るには難しい面があるのかもしれない。

今後の読書会の予定を書かせていただきます。次回は一月一七日(土)午後三時から大河原駅前のおーガビル内のコミュニティーセンター「多目的ホール2」で「詩人の人生」というテーマで栗駒の詩人佐々木洋一氏をゲストにお迎えして、亀之助のことなど話していただきます。その後、楽しく宴会などを催したいと思しますので、御参加希望の方は時間を空けておいてください。近くなったなら、いつも来ていただいている方々には、案内状をお送りさせていただきます。

そして、年が明けて一月一九日(土)午後三時から、同じ会場で、仙台在住のイラストレーター、村上かつみ氏をゲストでお招きします。村上氏は、二〇〇九年に、仙台駅近くの丸善仙台・アエル店ギャラリーで「亀之助の詩に黄色い雨が降り注ぐ」尾形亀之助詩集より、村上かつみイラスト展という、亀之助の詩からインスピレーションを得て描いたイラストの展覧会を開催されております。亀之助の詩から感じ取ったものを具象化する作業を行った類まれな方です。その時の、創造行為の過程をお話ししていただけだと思います。

ともかくにも、皆様のおかげで、やっと暦も一回りしそうです。この尾形亀之助読書会に関わっていた、参加者の皆さん、お話をしてくださった皆さん、繁昌院の住職さん、飲み屋の女将さんにマスター、ありがとうございます。これからもよろしくお願ひします。(小熊) (発行：2012.10.27)

※当通信にご感想などお寄せ戴くとありがたいです。

メール：kaisei@poetic.jp

住所：宮城県柴田郡大河原町大谷字原前五十五の五
小熊昭広 宛